

日野啓二対談集

創造する心

東山魁夷

今西錦司

江上波夫

読売新聞社

日野啓三対談集

創造する心

魁夷
錦司
波夫



日野啓三対談集

創造する心

「私の世界」シリーズ

定価一三〇〇円

昭和五十八年八月三十一日 第一刷

著者 東山 魁夷

今西 錦司

江上 波夫

日野 啓三

編集人 守屋 健郎

発行人 堀 内 稔

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一七七一 一〇 100

大阪市北区野崎町八一〇 530

北九州市小倉北区明和町一〇二 892

印刷／精興社 製本／大口製本印刷

© 1983, Kail Higashiyama & Others 0095—703540—8715

落丁本、乱丁本はお取り換えいたします

日野啓三対談集

創造する心

* 目次

目次

東山魁夷 —— 生かされて

唐招提寺壁画

何かの力に導かれて	10
絶体絶命のあとの無心	12

憧憬と郷愁

母の思い出	19
東に西に、往復する精神の軌道	22
芸術家になる後ろめたさ	24

闇の奥なる原点

無力を知って開かれた世界	33
自然の生命感が見えた	35

無常のなかの旅

閉じた厨子の中の宇宙	15
------------------	----

厳しさに惹かれてドイツへ	27
自分本来の世界の予感	30

風景と自分が一体に	38
純粹な心の持続こそ	41

求心力と遠心力	44
北欧のフィヨルドを創った力	46

交感の風景

石も生きている	52
切実な祈りの象徴	55

終生の遍歴徒弟

デンマーク体操いまも	62
真実が見える // 時	64

東山魁夷 — 開かれた孤独

見えるものと見えないもの

絵に志さんとする子あり	72
-------------------	----

日本の美と自然

私自身の日本画探究	78
日本人の文化伝統	80

内と外のふしぎな照応	49
------------------	----

椅子の独りごと	58
---------------	----

新しい旅が始まる	68
----------------	----

心象の世界とかたち	74
-----------------	----

母性的自然の中のメンタリティ	83
----------------------	----

内なるデーモンと外界

創造性にひそむ不気味さ	87
外界と心を通わせるもの	91

日本画、洋画の区別ない モチーフ	94
---------------------	----

今西錦司 — 成るがままの世界

全体的であること

ヨーロッパ的二元論をつなぐ	
---------------	--

視点	98
----	----

未来が見える学問	102
----------	-----

母なる自然

誇り高き遊牧民の血	106
祖父の影響	109

大興安嶺と蒙古	114
---------	-----

自然と生物の交感

「棲みわけ」の発見	118
はじめて太初に種社会ありき	122

気配の世界	125
-------	-----

サルから人類へ

『別世界』との関係	132	群れ落ちと近親婚タブーの謎	137
人類家族も群れ生活から	135		
人間家族、その起源と未来			
育児は群れ本位の行動	140	霊長類本来の姿にかえる	143
文明も輪廻する			
われら種社会全体を考えて	146	初めと終わり、無限の再生	148
別世界の呼び声			
自然を知る原点へ	152	山に酔う	155
今西錦司 ——— 創造性とは何か			
和魂洋才			
創造の根本に直観・洞察	160	別世界との交流	167
父性原理と母性原理	163		
直観という飛躍			
論理の元に美意識	173	創造する人間の条件	177

江上波夫 —— 地平を超える構想力

総合的に組み立てられた騎馬民族説

ユーラシア大陸史観から……………182

開かれた血筋と教育

祖父の夢、進取の気風……………190
考古学との出会い……………193

大草原の遊牧世界

蒙古草原での直観……………199
間一髪の奇跡も道連れに……………202
大らかな草原の人びと……………205
現代をつくった遊牧騎馬文化……………207

オリエントを掘る

オリエント大文明のその底には……………216
初めて国際的課題の解明に参加……………218
日本調査団独自の緻密さと正確さ……………221

歴史を構築する学風に恵まれる……………186

東西にまたがる

大文明圏を見はるかす……………196

世界史の大動脈“ステップの道”……………210
スキタイ黄金文化の伏流が

朝鮮に……………213

正倉院のルーツ発見に狂喜……………223

ユーラシア大陸のなかの日本

いまでも貧しいアジア・イメージ……

日本は孤島ではない……

自然も人も文化もヨーロッパと

対応……

夢うつつの間

混沌のなかのふしぎな時間……

永遠に死なざるものの声……

東西にまたがる大ドラマ……

大いなる影

——あながきにかえて……

非情な自然と対決する魅力……

農耕・騎馬両民族の原理を

超えて……

限りなく夢みるエネルギー……

装丁 多田 進

東山魁夷

—— 生かされて



東京パレスホテルで（昭和 58 年 3 月）

唐招提寺壁画

何かの力に導かれて

日野 先日東京での「唐招提寺全障壁画展」を拝見しましたが、いっぱいの人でした。これだけ広い層の人たちに愛され親しまれるというのは、絵として素晴らしいという以上に、日本人の心に広く深く訴える何かが先生の作品の世界には息づいているからだ、と改めて思いました。その「何か」を、あるいはそれを生み育てた先生の生き方について、お聞きしたいと思います。やはり、唐招提寺の障壁画から伺いたいのですが、この絵の準備のために先生は、本当に日本中をまわりましたね。海岸と山と。

東山 厨子ずしの絵もふくめて、御影堂の「山雲」「濤声」の障壁画を描くために、ほとんど日本中をまわりましたが、青森から鹿児島まで行ったことになります。

日野 実に十年余もの歳月とそれほどの情熱を、先生がこの仕事にこめられた気持ちというのは……。

東山 そうですね。私の場合はいつも自分は、無力だという気持ちだが非常に強い人間ですから、生かされているという感じで過ごしてきました。仕事も、自分がするというより、させられてきたような気がするんです。

奈良の古いお寺の唐招提寺と自分とを結びつける縁えんの糸いとというものも、初めからはっきり自覚していたわけでもありませんが、その仕事をしてみますと、やはり私の歩いていく道の上に唐招提寺があったような気がしますね。

私は鑑真かんじん和上のお像を東京のデパートで大分以前に国宝の展覧会が開かれたとき拝んだことがあります。あのお像は、和上が亡くなる直前に着手したお像で今日まで千二百年以上も守られてきたのですが、それがいまも息をしておられるように見える優れた彫像です。

それから『唐大和上東征伝』という伝記が残っております。こうして尊像を拝んで、さらに伝記を読みますと、非常に強烈なものが自分に響いてくるような気がしました。

それともう一つ不思議な縁では、昭和四十年ごろ京都を主題に連作を描いていて、よく京都へ来ていました。そのある日の朝ですが、ふと、奈良へ行ってみたいなあ、と思ひまして、朝早く近鉄の電車に乗って奈良へ向かいましたら、窓に小さく「今夜は唐招提寺の観月会」だと書いたビラがはってありました。

それで、唐招提寺の観月会は素晴らしいだろうと思ひまして、ホテルに着いてから、すぐ家内に電話をかけたんですよ。家内も驚いていましたが、「それでは、すぐ行きますよ」と言っ

川市の宅から大急ぎでやって来たんです。あいにく夕方になったら雨が降り出しましたが、幸い小降りになって月が出てきましたので唐招提寺へ参りますと、大麥清浄な感じのする情景なんですよね。金堂の正面の三つの扉が開け放たれて、その中に一体ずつ大きな仏様が見えまして、あとは月光と闇……。

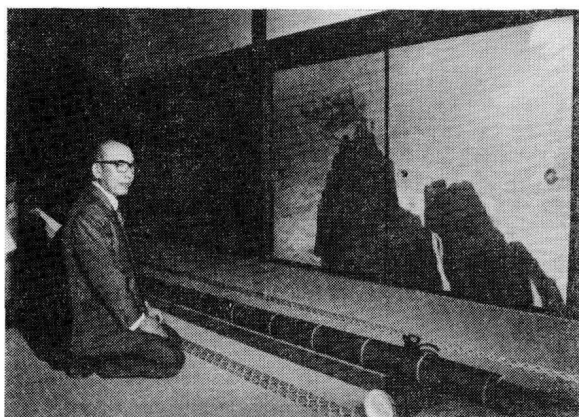
その後、昭和四十五年の十二月にある人を介して、森本長老が鑑真和尚をお祀りしてある御影堂にお厨子の扉を中心とした障壁画を、私に描いてほしいという気持ちを持っておられると聞きました。それまで私はお寺の障壁画というようなことは経験ありませんので、とにかく一度唐招提寺へ行って和上像を拝みたいと思ひまして、六月の五、六、七と三日間しか公開されませんでした、その時は黙ってお寺へ行きました。

和上の像を拝んで、この仕事が自分にとすれば、それはやはり与えられるものだろう。自分の力でなく導かれて、そういう仕事があればありがたいが——という気がして、お引き受けする決心をしたんです。

絶体絶命のあとの無心

日野 私も、自分を越えるというか包むというか、何か大きな力の遠い呼び声のようなものが、聞こえるときがあります。

東山 そうですか。私が昭和三十七年に北歐へ旅行したときも、自分が行こうと思ったのか、



唐招提寺御影堂の自作「瀟声」の前で

何かに呼ばれてそこまでたどっていったのか、わからないんですけども、そういうふうに唐招提寺の仕事も、初め、自分には何の意志の働きというものもなかったところへ向こうから呼ぶ声が聞こえてきたんですね。そうするとそれに従うか従わないかは非常に躊躇^{ちゅうちよ}、逡巡^{しゆんじゆん}する性質ですけれども、それに従った以上は、どこまでもやはりその声に導かれていくということなんです。

日野 でもその声に従う、その声に自分を委ねるということは恐ろしいことでもあって、なかなかそうはゆきません。ところで、いよいよ仕事を始められると、日本中を回って写生をされ、幾度も縮尺の下図や試作を描かれて、大変意志的な仕事振りだったと思うんですが。(笑い)

東山 いや、そうじゃなくてですね、出来そうもないと思うことにだんだん自分が入り込んでいくわけですから、まず自分が納得のいくだけの用意がないととてもそれは不可能だと、まず思ってしまうんですね。だから、十分に用意をするわけです。

それで第一期の、二つの部屋に「山雲」「濤声」という障壁画を描きましたけれども、それは、まず長い間の苦難に満ちた渡航のため、盲目となって日本へ着かれた和上に日本の風土の象徴としての山と海を描いてお慰めしようと思ったんですよ。それは象徴としての絵ですが、日本の風土という以上は、そこに日本の風土の現実感が練り込まれてないと、精神的な生命もとらえられないと思いますので、やはり自分の目で確かめたいではいられなかったのです。

でも、そうしてまずと準備時間が長くなって、本制作の時間が短くなる。初めは五つの部屋全部で五年ぐらいと、予定していたんですけれども、結局、第一期の二つの部屋に四年かかってしまいました。その中の三分の二は準備に費やして、三分の一の期間で描いたわけです。絶体絶命になってしまふんですね。いつでもそうなんです、私の場合。

初めは、一に一を足して二になるというふうに積み上げていくわけですが、最後に時間が足りなくて、どうにもならなくなってしまひまして、綿密にしていくなことを投げ捨てて、とにかく夢中になる。それでようやく出来上がるわけです。

日野 理性とか意志力というものは本来そういう一種逆説的なものだと思いますね。自己の意識を越えたものに到るために意識を最大限に使う。理性はぎりぎりのものではないのだからと理性的努力をいい加減にする人は、決して理性を超えられないものでしょう。そしていまの自分としては意志のすべてを尽くしたというある意味の諦念が、あの呼び声に従う虚心な勇気をにじみ出させるようです。